

SYŌNEN SYŌZYO

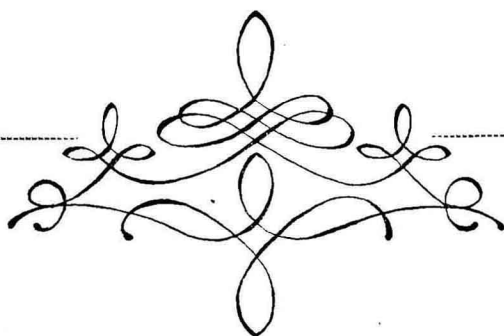
Sekai Jūpoku



世界無雙
三銃士
存本万册
徳富健

少年少女 世界文学全集

26



少年少女世界文学全集 26 卷
フランス編第(2)巻 第 1 回配本

N. D. C. 953
講談社 昭和 33
430 p 23 cm

昭和 33 年 9 月 20 日発行

訳者代表 なすたつぞう 那須辰造 さくらいなるお 桜井成夫
発行者 野間 省 一
印刷者 北 島 織 衛

発行所 東京都文京区音羽町 3 / 19 大日本雄弁会講談社

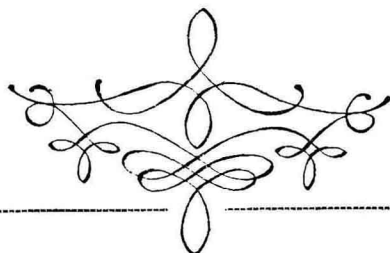
振替口座東京 3930 電話大塚 (94) 代表 3101. 3111. 3121

印刷 大日本印刷
製本 毛利製本
本文用紙 本州製紙
背皮 小林榮商事
クロス 日本クロス

定価 380 円

© 那須辰造 桜井成夫
昭和 33 年

落丁本乱丁本はおとりかえいたします



PRINTED IN JAPAN

目 次

少年 少女 世界文学全集

第 26 卷
フランス編第 2 卷

あ
あ 無情

ヴィクトル・ユーゴー作
那須辰造訳 9

第一編 ミリエル司教

あやしい旅の男 11

ひややかな月の光の下で 17

ミリエル司教 22

司教の家で 27

ジャン・バルジャンの身のうえ 35

愛のことば 40

いのるすがた 46

第二編 ファンティーヌ

母と母 52

うたわなない「ひばりの子」 57

マドレーヌ市長……………62

うたがいの目……………66

あわれな母……………71

「あなたを告発したのです」……………77

「ジャン・バルジャンはわたしです」……………83

「わたしのコゼットはどこに」……………92

オリオン号の囚人……………98

第二編　コゼット

クリスマス・イブ……………104

黄色い上着のおじさん……………110

人形をだいて……………115

おとずれた幸福……………123

なぞの場所……………128

修道院の中で.....134

第四編 マリウス

父ボンメルシーのゆいごん.....140

かべのすきまから見たもの.....146

まっかな焼けのみ.....152

市街戦の中で.....157

パリの下水道.....162

ああ、ジャベル.....168

よろこびとかなしみ.....172

二三
銃士.....181

アレクサンドル・デューマ作
桜井成夫訳

第一編

父親タルタニヤンどのの三つのおくりもの.....183

近衛銃士隊長トレヴィルどの……………193

アトスのかた、ホルトスの剣つり帯、アラミスのハンカチ……………201

近衛銃士と枢機卿の親衛隊士……………206

ルイ十三世……………213

第二編

宮廷の陰謀……………218

ボナシウ氏……………235

道中……………249

舞踏会……………266

アトスの話……………273

第二編

ラ・ロシエルの攻囲戦……………281

アンジューのぶどう酒……………289

《赤いはと小屋》

サン・ジェルヴェのとりで

ふたりの使者

第四編

脱走

カルメル派の修道院

処刑

結末

その後のこと

マテオ・ファルコーネ

ブロスペル・メリメ作
山内義雄訳

ジュールおじさん

ギイ・ド・モーパッサン作
石川湧訳

294

307

323

329

340

346

353

359

361

381

小さい町で

シャルル・フィリップ
鈴木力衛 訳 393

弟

395

アリスちゃん

400

朝のおはなし

シャルル・フィリップ
鈴木力衛 訳 405

バターの中のねこ

405

解

説

訳

者

412

読

書

指

導

滑川道夫

424

装
本

池
田
仙
三
郎

さ
し
え

向
井
潤
吉

松
野
一
夫

油
野
誠
一



あ あ 無 情

ヴィクトル・

ナ 須 辰

ユーゴー作

造 訳



あ あ 無 情

に つ い て

この「ああ無情」は、もとの名は「レ・ミゼラブル」といって、フランスの大詩人であり大作家であるヴィクトル・ユゴーの、最大の傑作であります。おそらくこの作品は、聖書やシェークスピアの作品とならんで、世界でもっともひろく読まれているものでしょう。主人公のジャン・バルジャンは、あわれな身のうえの人でした。わずかな罪のために19年も獄にとらわれていたのですが、ひとたび愛の心にめざめてからは、世のために、すべてをささげようと思いました。そして、それからのジャン・バルジャンには、世の中のありとあらゆるつめたさがふりかかってきます。ですが、かぎりなくふかい愛に、ジャン・バルジャンは生きぬいていくのです。愛の使徒ともいってよいこの主人公のおおしいすがたに、むねをうたれ、心をゆすぶられない人はいないでしょう。そして、つぎつぎにくりひろげられる場面に、思わず手にあせをにぎりしめているうちに、わたくしどものむねにも、かぎりない勇気がわきおこってきます。まことに愛と正義の書とは、このような物語のことをいうのでありましょう。

(那 須 辰 造)

さしえ・向 井 潤 吉

第

1

編 ミリエル司教^{しきょう}

あやしい旅^{たび}の男

一八一五年の、十月のはじめごろのこと。日ぐれどきもせまった、小さなディーニュの町に、ひとりの旅人^{たびと}がてくてくと歩いてやって来た。

もう通り^{とち}を歩いている人もすくなく、町はひっそりしていた。それでもあちこちの戸口^{とぐち}に出て、往來^{かうらい}をながめている人もいたが、この旅^{たび}の男を見て、なんとなく不安^{ふあん}そうにまゆをしかめた。じつさい、これ以上^{いじょう}みすばらしいようすの旅人^{たびと}はないといつてもいいくらいだった。

たけは高くはなかったが、かたはばがひろくて、がっちりとしたからだつきの男だった。年のころは、四十六、七か、せいぜい八ぐらいだろう。

顔^{かほ}は日にやけ、あせみどろになっていた。皮^{かわ}のぼろしのひさがたれさがって、その顔^{かほ}の一部^{ぶぶ}をかくしていた。黄色^{きいろ}くよごれたシャツのえりもと、小さな止め金^{とめがね}でとめてあるきりなので、毛^けぶかいむねがのぞいていた。ネクタイはよれよれになり、青いズボンはすり切れて、かたほうのひざは白く、もう一方^{ひう}のひざにはあながあいていた。はい色のぼろぼろの上着^{うわぎ}には、かたほうのひじに青いラシャのつぎをあててあった。

せなかには、まだあたらしい皮^{かわ}のふくろを重^{おも}そうにせおっていた。手にはふしくれだったつえを持ち、足には鉄^{てつ}のびょうをうってあるくつを、す足のままではいていた。

頭^{あたま}はみじかくかりこんであつたのか、すこしのびはじめているらしいかみが、ぼろしのまわりにさか立^たっていた。そして、あせにまみれ、ほこりにまみれ、このみすばらしいすがたが、いつそきたならしく見えるのだった。

だれも、この男を知^しっている人はなかった。どこからかやって来たのだらうか。たぶん一日じゅう、歩きどおしに歩いてきたのだらう。たいそうつかれているようすだった。通りのはずれに来たとき、なみ木の下に立ちどまって、そ

こにわき出ている水をのんだ。これを見た子どもたちが、わいわいしながら、あとをつけていった。

ほんの二百歩も歩くか歩かないのに、旅人は、また立ちどまった。そこに市場があつて、すぐそばに水がわいていた。旅の男は、また水をのんだ。よほど、のどがかわいていたのにちがいない。

それからこの男は町かどをまがり、町役場の方へむかつていった。なんの用があるのか、役場へはいつていった。けれども、十五分ばかりでまた出てきた。門のそばの石のベンチに、憲兵がひとりこしかけていた。旅の男はぼうしをとつておじぎした。が、憲兵はあやしそうにじろじろと見つめた。

そして、男のうしろすがたを見おくつていたが、首をかしげ、建物の中へはいつていった。(憲兵というのは、軍隊の警官である。オンの政府がたおれ、ふたたび王制になつて、国内がよくおさまつていなかったで、憲兵が市や町を警備していたのだ。)

この町にクロア・ド・コルバという宿屋があつた。ディーニュの地方では、いちばんりっぱな宿屋であつた。旅の男は、この宿屋の方へ足をはこんだ。道がわに、料理場の戸口があつた。男はこれを見ると、戸をおしあけて、中にはいつていった。

かまどには、火がもえたつていた。主人は、かまどに氣をくばったり、なべを見まわったり、料理のさしずをしたり、いそがしくたち働いていた。ちやうど客馬車の御者たちが、一ぱいやりにあつまつてくる時間だ。

旅をしたことのある人なら、だれでも知っているとおり、御者くらしい、はでな食事をするものはない。それでいま、料理じまんの主人が、うでによりをかけているのだった。となりのへやから、御者たちがわいわいと大声にわらう声が聞えていた。

だれかはいつてきた音を耳にして、主人はかまどから目をはなさずにいつた。

「いらつしゃい。なんのご用でしようか。」

「食事をしたいんです。それから今夜は、とめてもらいましょう。」

「どうぞ、どうぞ……。」

そういうながら、主人はふりむいた。旅の男のあやしいすがたを見ると、こういつた。

「金をはらつてくださるなら……。」

すると男は、皮ぶくろの金入れをポケットからとり出し

て、主人に見せた。

「このとおり、金は持っています。」

「じゃ、ようござんす。」

で、旅人は金入れをポケットに入れ、せなかからふくろをおろして、戸のそばにおいた。そして、つえを持ったままで火のそばに行つて、こしをおろした。ディーニュは山間の土地なので、十月になると、もう夜は寒いのだつた。

主人はいそがしく働きながら、こっそり旅人に目をつけていた。

「すぐに食事ができますか。」

と、男はたずねた。

「へい、すぐに……。」

と、主人はこたえた。

客は、主人の方にせなかを向けて、火にあたっていた。そのあいだに主人は、ポケットからえんぴつを取り出し、古新聞のはしをひきやぶると、いそいでなにか書きつけた。そして、小ぞうにわたし、その耳に口をよせて、なにごとかさやいた。小ぞうはうなずいて、町役場の方へかけていった。客の旅人は、それには気がつかないで、またたずねた。

「食事はまだですか。」

「はい、すぐに……。」

まもなく小ぞうが帰ってきた。一まいの紙きれを手持っていた。主人はいそいで、それをひろげて読んだ。そして、あやしそうに首をふり、

じつと考えこんでいたが、とうとう客に声をかけた。

「すみませんが、今夜はおとめできません。」

それを聞いて、男はちよつとこしをうかせた。

「どうしてです。金を持っているといったでしょう。」

「金のことでないんです。」

「じゃ、どういうわけです。」

「じつは、へやがつまっていますして……。」

「それなら、馬小屋でもよろしいから。」

「おきのどくですが、馬小屋もいっぱいです。」

「では、ものおきのかたすみでいい。ふとんのかわりに、わ

ら一たばでもあればいい。とにかく、さきに食事をさせてく

ださい。」

「食事もあげることができません。」

主人はきっぱりいった。ひくい声だったが、それは旅人の

耳におもしくひびいた。男はさつと顔の色をかえて、立

ちあがった。

「けさ、夜明けから、歩きどおしに歩いてきたんだ。はらの

中に、なんにもはいっていないんだ。金ははらうから、なに

かたべさせてくれ、たのむ。」

「なんにもありませんよ。」

「なんにもないってことがあるものか。あれはなんだね。」

と、男はわらいながら、かまどの方をふりむいた。

「あれは、ほかのお客がごちゅうもんなすったんです。」

「だれがちゅうもんしたんだ。」

「御者さんたちが……。」

「何人いるんだ、その御者たちは。」

「十二人おいですよ。」

「ふん、二十人ぶんぐらいは、たつぷりあるじゃないか。」

「前金をいただいているんです。お分けはできません。」

男はどつかとこしをおろして、つぶやいた。

「おれははらがすいてるんだ。宿屋でめしのちゅうもんをし

て、なにが悪いんだ。ここを動かないぞ。」

その耳もとへ身をかがめ、主人はにくしくいった。

「出ていってもらいましょう。」

旅人は前かがみになって、つえのさきで火をかきおこして

いたが、ぎよつとしたようすで、ふりむいた。なにかいおう

とした。が、主人はにらみつけながら、小声でいいした。

「なにもいわなくたって、わかっている。おまえさんの名も